

香取遺産

Vol.30

「清水入瓦窯跡」 かわらがま 古代の瓦窯



▲清水入瓦窯跡

清水入瓦窯跡は、虫幡地区に所在する7世紀後半の瓦窯跡です。

市教育委員会では、瓦窯跡の内容を把握するため、確認調査を実施しました。この調査で、窖窯を2基確認しました。

窖窯は台地や山の斜面にトンネル状に作ります。その構造は、一番下に焚口、その奥が薪を燃やす燃焼室です。燃焼室に続いて製品を詰めて焼く焼成室があります。焼成室の床面は傾斜をつけて作ります。一番上に煙出しのための煙道があります。

清水入瓦窯跡では、焚口から焼成室の一部がすでに壊されていたため、窯全体の構造を把握することはできませんでした。残されていた焼成室からは、多くの破損した瓦が出しました。失敗品を残したまま窯を廃棄したようです。このほかに床面の補修や補強のために利用した瓦もありました。

写真は、調査した窯跡を東から撮影したものです。焼成室の床面

が傾斜している様子がわかると思います。

出土した瓦は、平瓦と丸瓦が大半で、棟に使用する熨斗瓦や面戸瓦もありました。

これらの瓦は、凹面に布目の痕がつくことから布目瓦とも呼ばれています。

その製作技法は、細長い板を桶状に組み、布をかぶせた型に、粘土を巻きつけて筒状に成形し、それを縦に4分割して作ります。この製法は、円筒の型を桶とも呼ぶことから「桶巻作り」と言います。丸瓦は平瓦よりも径の小さい型を用い2分割して作ります。

清水入瓦窯跡で作られた瓦は、東へ約1kmの木内字権現台に所在する木内廃寺に供給されたと考えられます。

木内廃寺の造営のために、瓦の製法や窯の構築方法など専門の知識や技術をもつ工人集団が、この地にいたこと示しています。